



目 婦人

私の訪れを部屋のおじいさんは、腰を痛めたとかで、一人ベットで食事をして待っておられた。彼が山口の老人ホームにいた時のこと、夏休みに中・高校生ボランティアの訪問を受けた。その時、子どもたちと、ぞうり編み^①をしたが、子どもたちがあまり喜ぶのでいつもは二足しか作らないのに、その日から五足編むようになった。その結果彼は腰を痛め、特別養護老人ホームへ送られてきた、といつて苦笑した。しかし、その話

は彼にとって悔いではなく、むしろ喜ばしい出来事のように聞こえた。

人間の手は人を喜ばすために働き、人に差し出される時自分自身の喜びと、生きる力になるものだと感じていたがこの老人との対話によって、

再訪を約束して

藤 屋 紀 子

それを確信した。

ホームや施設は社会から隔離し、人間を保護する場所ではなく、いつも人の姿が目につき、話し声が聞こえてくる——そんなものであったらよいと思う。そうでないと一人ひとりはとどめられ、他人

を持たない貧しい存在になつてしまふ。

暖かい部屋とおいしい食事がきれいなベッドがあっても、それだけで人は生きてはいけない。やさしい友人の訪問、手のぬくもり、思いやりのこもった言葉。つまり、かかわ

りをもつ、もう一人の人間が必要なのではないだろうか。

神は、イエズス・キリストをこの世にお送りになり、人間の顔を私たちに見せてくださった。私たちはキリストと出会うために、本当に小さな所へ向かって出発しなければ

ならないと思う。貧しい人びと、という言葉は失礼みたいで、あまり使うのが好きではなかったけれど、お返しが出来ない人びとの中に入っていくとき、確かに彼らの中に神を深く感じる。

「この次はいつ来てくれるかいのう」。帰りぎわに、すっかり手を握りいわれた言葉が耳から離れない。キリストにお会いするために、声の聞こえる生活のまった中に入つていかなければならない。

私の足がそこへ向かう時、また神とのつながりができくるような気がする。老人の手のぬくもりを感じつつ、次の訪問を約束した。私は、今、この日を心待ちにしている。